

移されています。このような具体的な共同利用化と共に、委員会・専門委員会等を通じて将来計画や共同利用事業の策定・人事などへ多くの方々の意見が反映されるということも、共同利用の大きな実質部分であります。これらの体制も数ヶ月のうちに整え、名実ともに天文学の共同利用機関としての内容を備えてゆきたいと考えています。

なお、国立天文台発足に到る数年間、計画の策定・検討に協力頂いた多くの台内外研究者の方々、膨大な概算要求書作成に働いて下さった職員の方々、そして様々な機会に貴重な意見を寄せて頂いた全国の天文学関係者の方々に深く感謝したいと思います。今後とも、協力・支援・叱咤・激励をお願い致します。

## 東京大学理学部附属

# 天文学教育研究センターの発足

内 田 豊\*

7月1日から、100年にわたって東京大学の一部であった東京天文台が東大を離れて国立大学共同利用機関に移行するに当たって、東京大学理学部に天文学教育研究センターが誕生した。宇宙からの微弱信号を受けるための大口径望遠鏡など巨大科学化して来た天文学において、我が国がそれに追随、さらにはそれをリードして行くために、巨大科学となった天文学を推進できる中心的機関（国立大学共同利用機関“国立天文台”）が必要となって来た事と関連して今回の東京天文台の国立共同利用研究所移行の方向は、米国その他の例などを見ても天文学の時代の流れであり、東大も含む各大学の天文研究者の強く望む所でもあった。しかし東京大学の天文学研究、教育がかなりの部分を東京天文台に依存して来た事を考えると、東京天文台の国立大学共同利用機関移行は、これをサポート、活用して行くべき主要大学の一つとしての東京大学の研究陣を弱体化してしまふ恐れがあった。これでは東大としても賛成出来ないし、又優れた人材の補給が減る事になれば新しく出来る国立研にとってもマイナスである、と云う共通の認識に立って、国立天文台移行側の協力を得、又、幸い諸方面の御理解等も得られて、東京大学理学部に天文学教育研究センターが新しく設立される運びとなったものである。

センターは三鷹で国立天文台と共に従来の東京天文台敷地に立地し、銀河天文学、恒星・太陽天文学、電波天体物理学の3分野（部門相当）、及び1観測所（木曾観

測所）からなり、東京大学理学部天文学教室と密接な連携を持ちつつ、主として観測面での基礎的及び萌芽的研究を行う事を目的とし、大学院、学部教育にも参加する。木曾観測所は世界で第4位の口径105cmのシュミット望遠鏡を持ち、国内で最も暗い空を活かして、暗い銀河群の研究等を行なう（全国の関連研究者による研究にも開かれている）。木曾観測所は将来は更に新しい望遠鏡を設置するなどして、東京大学の天文学研究再発展の足掛かりともなるであろう。又、東京大学として天文学にテコ入れをする必要ありとの理学部内、学内のあたたかいバックアップを得て、64年度概算要求には電波天文学の新しいフロント＝サブミリ波天文学のための10m高精度望遠鏡を載せていただく事が出来た。これは技術の発展により可能となって来た波長0.5~1mmのあたりの天文学の残された波長域（検討をつめているうちに外国ではこの1~2年程に1~2の望遠鏡が出来始めているが、まだ今なら間に合う）に挑もうと云うものである。我が国の技術力を活かし、且つ大学にふさわしい先進的、萌芽的な開拓的研究であり、これが実現する事が強く希望される。センターはこの他、宇宙研の人工衛星Solar-Aに関わるグループ、光学赤外線望遠鏡計画に関わるグループ等も擁して、21名の小グループではあるが東京大学の観測的天文学を再発展させる核として最大の努力をして行く所存である。大方のあたたかい御声援を賜わるようお願い申し上げます。

\* 東京大学理学部附属天文学教育研究センター長